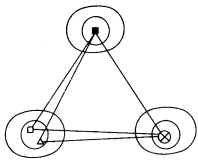


図4 身振り信号に
音声を重ねた発信状態



△：音声「オシッコ」

図5 音声を受信すると
身振りを発信する状態

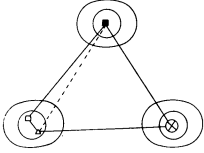
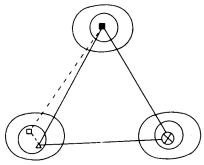


図6 音声を受信すると
トイレで排尿できる状態



(ここに示した図中、X、Y、Zは空間的に離れていることを表すものではない。)

図1 おむつをしている状態

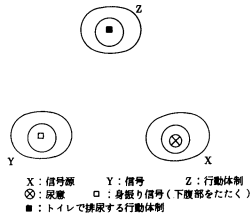


図2 身振り信号の受信が
可能になった状態

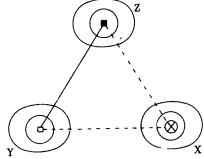
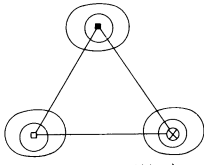


図3 身振り信号-排尿行動
体制の対応成立状態



以上の論考を下敷きにして、T・N
に対する指導内容・方法を考え、
適時、適切、適度なものであったかど
うか、各自検討をしていただきたい。

冒頭のコミュニケーション能力を伸
ばす基本的な考えを、次に引用する。
「子供たちが『話す』ためには、目
や耳から入ってきたいろいろな事象を
受けとめ理解し(受容)、関連づけたり
組織化し(連合)、そして表出する(表
現)という一連の機能の働きによって、
成立すると考えられる。ことばで表現
できないということは受容-連合-表
現というコミュニケーション過程のど
こに遅れがあるのか、発話器官の機能
に問題はないのかなど、できるだけ総
合的に診断を試みていかなければなら

五、雑誌掲載の研究報告の検討

①「小学校低・中学年を対象としたコ
ミュニケーション能力を伸ばす指導」
(高橋健剛、精神薄弱児研究、No.234、
1978・3)

「子供たちが『話す』ためには、目
や耳から入ってきたいろいろな事象を
受けとめ理解し(受容)、関連づけたり
組織化し(連合)、そして表出する(表
現)という一連の機能の働きによって、
成立すると考えられる。ことばで表現
できないということは受容-連合-表
現というコミュニケーション過程のど
こに遅れがあるのか、発話器官の機能
に問題はないのかなど、できるだけ総
合的に診断を試みていかなければなら

ない。

コミュニケーションの方法は、音声
系だけに限らないことはすでに述べ
た。この考えに従うと、聾や盲聾の子
供のコミュニケーションは不可能だ
ということになりはしないか。また、こ
れとは別に、コミュニケーションを考
えるとき、われわれは音声だけによっ
て行っているのではないということにも注
目する必要がある。図7に示したよう
に、交信行動はもはや音声や文字だけ
によるだけでなく、自覚信号、象徴信
号等が組となって受信され、加えて時
間経過上直前の行動の結果も関与し
て、活動の方向や強さを規定するこ
とになる。これを信号の累和効果とい
うが、コミュニケーションを考えるとき
、これを無視してはいけない。受容、連
合、表現の考えについては、これまで
の論考を参考に整理していただきたい。

図7 生命活動に繰り返される
信号組のようす

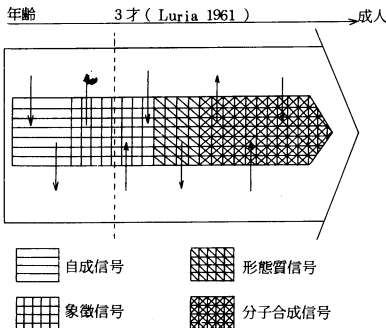
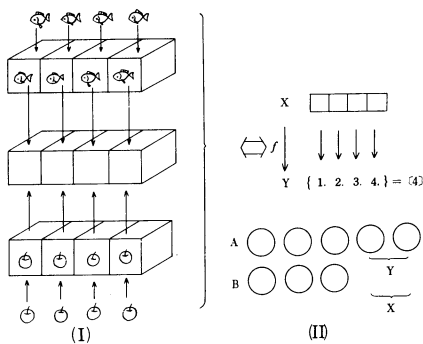


図7 生命活動に繰り返される信号組のようす

図8 1対1対応写像関係



②「5は3よりいくつ多いか」につい
ての「考察」(瀨千恵子、前掲誌
No.229、1977・10)
この報告によれば、「どちらが多い
か」までは分つても、「いくつ多いか」
はむずかしいという。そして、事実の
は握のし方の発展があつて、その上
でコトバがわかつてくる筋道があるこ
とを指摘して結論としている。
図8(I)のような数字と物の集合の量
との間に一対一対応写像関係を理解し
ていることを前提とする。図8(II)のX
とYとの関係を等価視し、Xは空集合
なので、AがBよりYの数だけ多い、
という正解にいたるまでには、集合A、
Bの属性に注目し、概括したり、抽出
経たりする操作を経なければならな
い。正解までの操作の詳細は別の機会
にゆずることにするが、こうした操作
の回数が増すと、課題はそれだけ次元
が高くなり、難かしさを増すことを意
味する。